



Title	ネパールにおける成人識字学習者を取り巻く状況の一考察：カースト社会のコンテキストにおいて
Author(s)	長岡, 智寿子
Citation	大阪大学教育学年報. 2002, 7, p. 245-258
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7114
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ネパールにおける成人識字学習者を取り巻く状況の一考察 ～カースト社会のコンテクストにおいて～

長 岡 智寿子

【要旨】

開国(1951年)以来、ネパール王国(以下ネパール)は近代化に向けた様々な開発施策に取り組んできているが、政治的、経済的、社会的に今も不安定な状態が続いており、教育開発についても多くの課題が残されている。就学経験が乏しかった人々に対する Non-formal Education (NFE) プログラムも重要課題の一つであり、主に成人女性を対象にした識字教育がネパール全土で展開されている。

NFEプログラムは政府よりもNGOの主導により行なわれており、関連する組織の数は500以上にもおよぼされている。しかし、プログラムに携わる人々の視点や姿勢から観察されることは、本来、支援されなければならない学習者の立場を無視したものが多く、また、NGO間の競い合いが目立つ傾向にあり、ネパールが半ば開発案件の市場と化しているといえる。

本稿では、これまでの調査研究をふまえながら、現在、行われている識字プログラムを改めて検討するとともに、カースト制度を下部構造にもつ社会の中で展開されている読み書きの学びを、学習者の視点をもとに考察していくこととする。

I：問題の所在

(1) ネパール社会＝被援助大国の現状 ～ 開発という名の市場 ～

開国(1951年)以来、ネパール王国(Nepal Kingdom：以下ネパール)は近代化に向けた様々な開発施策に取り組んできているが、政治的、経済的、社会的に今も不安定な状態が続いており、教育開発についても多くの課題が残されている。例えば、国の識字率は男女合わせて約40%、就学率は69.4%であり¹⁾、現在実施されている第9次5ヵ年計画においても初等教育の普及が最大の課題となっている。また、就学経験の乏しかった人々に対するNon-Formal Education(以下NFE)プログラムの推進も重要な課題のひとつであり、主に成人女性を対象にした識字教育がネパール全土で展開されている。²⁾

近年では、年間に約20万人の成人が識字プログラムに参加したと報告されており³⁾、また、プログラムに携わるNGO(国内、海外含む)が無数に存在することからも、成人識字教育への関心は高まりを見せているといえる。こうした現状は、特に1990年にタイのジョムチェンで開催された「万人のための教育」(Education for All)世界会議における提案を受けて、また、ネパール国内の民主化の動きも追い風となって生じたものである。

ネパール国内で展開されている様々な教育支援プログラムの中で、とりわけNFEについては、政府よりもNGOの主導により行なわれており、関連するNGOの数はおよそ500にもおよぶ(Tuladhar,1999,p136.)。そのけん引役的な存在であるNGOは海外資金によるNGO(以下INGO: International Non-government Organizations)であり、各々のプログラムを開発してプロジェクトの実績を残している。

しかし、プログラムに携わる人々の視点や姿勢から観察されることは、本来、支援されなければならない学習者の立場を無視したものが多く、Khanal(2001)が批判するように、「(INGOは)商業主義的で、ある特定の集団のみをターゲットにし、プロジェクトの成果報告やプログラム開発を優先にしようとする」(Khanal,R,2001.p67.)実態があることは否めない。具体的には、次のようなことがあげられる。第一に、多数のNGOが存在するにもかかわらず、互いの経験を共有することがなく、NGO間のネットワークが築かれていないこと。第二に、単独で成果をあげようとするため、同種の活動を行なっているNGO同士の競合が目立つこと。(Tuladhar,1999,p150.)第三に、「開発」という語を乱用し、プロジェクトのための資金援助を招くことが目的となってしまっていることである。

今日、カトマンズ（Kathmandu）市内を歩けば、「○○Development」（○○開発）と書かれた看板を頻繁に目にする。それだけ、都市部に拠点をもとうとするNGOが多いことがうかがえる。「開発」、「NGO」と名が付くものの裏側には、何らかの手だてで利益に与かろうとする人々が絡んでいる場合が多く、このような体質を見抜くことも、援助活動を行っていく上で重要なポイントであるに違いない。つまり、ネパールが開発案件のマーケットと化している傾向にあり、NFEに関わるNGOの取り組みにおいても、真に教育支援を求めている学習者のニーズに応える形で展開されているとはいにくい状況にある。

これらの根本要因は、ネパール社会の固有の体質にあるといっても過言ではない。ビスタ（Bista, D.B, 1991）が鋭く批判するように、一般的に、ネパールの社会はバフン（Bahun）やチェットリ（Chhetri）といった高カーストが支配する体制となっており、組織の主要なポストはそのような高位カーストにより占有されていることが多い。過去のラナ政権（1846-1950）下で強化されていたパンチャーヤット体制⁴⁾の名残りを引くかのように、「チャカリ（有力者への接見）」や「アフノ・マンチェ（自分の身内）」を優遇することに努めようとする人々の動きは、この国の低開発の要因のひとつであるとも考えられている。⁵⁾

（2）識字プログラムの評価について ～学習者の「立場性」⁶⁾が考慮されることを求めて～

これまで、識字プログラムを取り巻く現状について、カースト社会のコンテクストに触れながら述べてきたが、ではネパール社会で実施されている識字プログラムは、実際にはどのように評価されているのだろうか。

ネパールの成人識字プログラムに関する報告や、プロジェクトの成果に関する評価は各団体により様々な形で行なわれている。例えば、プログラムの実施により確かな成果をあげたという報告（CERID, 1998）や、プログラムを行なったことにより、コミュニティ開発への契機になったという実績報告（佐藤、村上、神馬、1999）もある。しかし他方では、プログラム参加者は学習期間が過ぎると、再びもとの非識字状態に戻ってしまい、学習の成果が維持されていない（例えばComings, J.P, 1995）との否定的な評価も散見される。

筆者は数種のプログラムを観察し、フィールド調査（長岡a, 2000）を行った結果、基本的には後者による評価を支持するとともに、ポストリテラシー（基礎的識字学習期間終了後の継続教育）プログラム終了後にも、何らかの形で学習者を継続的に支援していく必要があることを指摘しておきたい。なぜなら、プログラム報告の多くは「識字率は〇%上昇した」⁷⁾、学習内容が定着しない理由は「（学習者の）半数以上がドロップアウトしてしまうため」といった量的なコメントや学習者側に原因を帰することに終始しており、具体的な改善策や提案にまで踏み込んで論じているものは少ないからである。

確かに、どのような学習が行なわれたのかという問いに対し、具体的な数値で学習達成状況を示すことは説得力をもつであろう。しかし、学習参加者がどのような経緯で、どのような学びを展開していったかという、数値化されえない要素にも目を向けて分析する姿勢が、NFEにおいては特に必要ではなからうか。識字率の上昇のみを評価基準とすることは、宮島（1999）が述べるように、本来、質的な多様性、独自性のなかにあつて、等質的連続性の上に乗らないはずの要素がなんらかの置き換え操作（例えば数値に換算するなど）を通じ、大小、高低、優劣とランクづけすることではなからうか。氏は人々のものの見方、感じ方、ライフスタイルなどをすべて量的な要素に置換することは近代社会の衝動であると指摘し、もっと多面的な考察が必要であるとしているが、本稿においても、このような視点を大切にしたい。

識字プログラムに参加している学習者は低カーストに属している女性が大半であり、低カーストの人々が持っている世界観やカーストによる差別に対する想いを分析した上で、識字プログラムのあり方を検討しない限り、効果的なアウトリーチは難しいと考える。そこで、本稿では、過去の学習参加者がどのような生育歴を持ち、また、どのような経緯で学習に取り組み、その結果として学習の場への参加をどのように評価してきているかといった、より質的な側面に注目する。また、これまでの調査研究をふまえながら、学習参加者を取り巻く環境やライフスタイル、人的な交流等の分析を試みる。具体的には、学習参加者が女性であり、低カーストであるという当該社会において周辺化された「立場性」を考慮し、カースト社会

を下部構造にもつ社会の中で展開されている読み書きの学びを、学習者の視点をもとに考察していくこととする。

Ⅱ：カースト制度を下部構造にもつ社会の中で展開される識字教育

(1) ネパールで行なわれている識字プログラム

冒頭でも述べたように、ネパールは今やNGO大国となり、多数のNGO（国内外含む）が各々のプログラムを展開している。その中でもいくつかの主要なINGOが政府に代わって識字プログラムを中心としたNFE支援を行なっている。ネパールで行なわれている識字プログラム⁸⁾の形態は、実施団体により教室、設備、指導者、時間帯等、様々であるが、一般的にはネパール全土で同一のテキストが使用されており、学習期間も6ヶ月の基礎的学習期間、3ヶ月のポストリテラシーという仕組みになっている。クラス編成は近隣に住む人々が参加しやすいように配慮されており、参加者の都合のよい時間帯に行われている。しかし、実際には途中で止めてしまう人が非常に多く、ドロップアウトを防ぐ方策に力を注がなければならない。中には1クラスの人数が5人を切ると、学習を取りやめてしまう団体もあるが、そうした学習の運営における当面の規則は、プログラムの支援団体により異なっている。ここで、現在ネパールで行なわれている主な識字プログラムについて、簡単にその内容を紹介していくこととする。

まず、ネパール国内で行なわれている識字プログラムの一般的な教授法について述べておく。それはGuru-kuruシステム⁹⁾と称する暗記中心の学習形態であり、指導者がテキストに書いてある単語を読み上げ、それに続いて復唱していく形式を何度か繰り返した後、文字の表記について学習していくものである。指導者も特別なトレーニングを受けずに指導することができるが、テキストを暗記することを重視するあまり、指導者と学習者の関係が一方通行となってしまう、自由な発想を生み出しにくいといえる。

テキストは無料配布される「ナヤゴレト」（＝新しい道）と称するものであり、かつてユネスコ賞を受賞するなど、識字のテキストとしてはよくできていると評価されている。しかし、70年代から一度も改訂されておらず、内容も汎用性がなく、学習者の興味を引かなくなってきたおり、それに代わるテキストが求められている。（長岡,2000a）

こうした学習形態を改善しようと、INGOでは地方のNGOと提携しながら、独自のプログラムを実施している。その中でも、代表的な例として以下三点を紹介する。

まず、識字プログラムに携わっているINGOによるプロジェクト開発の近年の特徴ともいえるPRA (Participatory Rural Appraisal) ¹⁰⁾を基軸にした参加型開発を目指すアプローチがある。PRAは1970年代から試行されていたが、近年ではPRAの理論をもとに「REFLECT¹¹⁾」と称する教授法が脚光を浴びている。主にイギリスに本部を持つACTIONAIDにより展開されている。

次に、ネパール政府から全面的にNFEプログラムを委託されているINGO、World Educationの取り組みについて述べておく。World Educationは1951年に米国で活動を開始し、国際的にも名が通る数種の実績を誇る団体である。ネパールでは「Health Program」や、自立促進のために識字プログラムと統合する形で貯蓄のノウハウを身に付けようとする「WEEL(Women's Economic Empowerment and Literacy)」などを展開している。その他、識字の教材開発にも力を入れており、刊行物も数多い。

最後にUMN (United Mission to Nepal) について記しておく。UMNは1954年にカトマンズ近郊の古都バクタプール (Bhaktapur) に病院を開設し、女性のための医療診療から活動を開始したINGOである。今日では医療協力に加え、教育支援、技術開発、および農業指導等、幅広く活動を行なっている。中でもNFEプログラムにおいては、識字教育を中心にネパール全土で活動しており、特にポストリテラシーに力を入れている。具体的には、学習者に読書の習慣を根付かせるために、ネパール語の簡単な読み物を数種類に渡り作成しており、内容にも幅をもたせるなどの試みがなされている。

以上、簡潔に事例を紹介したが、今後、これらの試みが活かされ、ネパールで行なわれている識字プログラムが質的な発展を遂げ、幅広く定着していくことを望みたい。¹²⁾

(2)「識字プログラム」の参加にあたって

筆者が調査を行ったパタン (Patan) 市のA地区 (仮称) では、古くから複数の団体が識字プログラムに取り組んでおり、他の地区に比べ、過去の学習経験者も多い。パタン市はネワール (Newar) ¹³⁾ を中心にした古都であり¹⁴⁾、都市部ということもあって、市全体としての識字率も男性が83.9%、女性が67%と全国レベルよりはるかに高い。A地区の人口は約3082人、690世帯¹⁵⁾ であり、観光客が頻繁に訪れるエリアにもさほど遠くないため、観光収入により生計を立てている人も少なくはない。

しかし、そのような都会の一角で、日の当たらない生活を強いられている人々が寄り添いながら生活をしている。彼らはネパールの中では低カーストに属し、常に社会の中で周辺化されている立場にある。A地区内で識字プログラムに参加している学習者の多くは、そのような低位のカーストに属する女性である。また、彼女たちの多くは、前項で述べたUMNが行っていたプログラムに参加していた。彼女たちは学習に参加するにあたって、どのような心境であったのだろうか。次に示すのはフィールド調査¹⁶⁾ によるインタビュー記録の例である。

何をすることなのか、何も知らなかったから、びっくりした。私は別に参加したくてやって来たわけじゃなかったから。(笑) あの子 (友人) が行くなって言うから一緒に来たんだけど。勉強なんか、子どもの時にちょっと学校に行ったことがあったけど、全部忘れてしまったから。だから、教科書を渡された時はびっくりした。勉強は子どものやることだと思っていたし、私には関係のないことだよね。私たち (自分の家族) は皆、ネパール語が書けないけれど、今の仕事には特に問題はないと考えているから。子どもの時は、学校に行くと、先生に怒られたんだから。「あんた達の来るところじゃない。」って、怒鳴られたことを覚えてるから、今更ねえ。勉強は関係ないってずっと思ってたから。

(45歳a、野菜売り)

家の前に皆 (近所の人たち) が集まってるから、何をしてるのかと思い、聞いてみた。今度、皆で集まって、ネパール語の練習をしようと言われたんです。別に興味なんてなかったから、黙ってた。でも、スジャが行くと言い出したので、皆が行くことになってしまった。私は勉強なんて、必要のないことだと思ってたから、断った。でも、その人 (指導者) から、何度も「あなたも来なさい」って言われて。昔、わたし達やカミ、サルキ¹⁷⁾ とかもそうだけど小さなカーストは学校に行くことができなかったのよ。そんなこと、知らないでしょ? 行ったら嫌がられるんだから。(先生から) 怒られるのよ。だから、子供の時は (勉強する) チャンスなんてなかった。リテラシークラスがはじめてだった。もし、上のカーストが食事をしていたら、近づくとも言われてた。カミもサルキもね。畑でも嫌がられたもんよ。(嫌がられても) 仕方ない。どうすることもできないから。(笑)

(38歳a、土産物売り)

上記の例以外にも、学習者の大半が就学の経験に乏しく、また、低位のカーストということで、学校に行くと嫌がられたという被差別経験があったことが確認された。当該社会の中ではマイノリティーであり、社会の主流とされる人々に接した際に否定的な態度をとられてきた経験から、自らも公的な場に出て行くことを拒む姿勢が身についてしまったことが見て取れる。そのせいか、自発的に学習に参加するような態度は見られず、偶発的なきっかけにより、学習の機会にアクセスすることができたと解釈される。つまり、識字プログラムは、学習することを奨励され、教科書とペンを握る非日常的な機会であり、普段、接することのない「場」でもあったことがわかる。

(3)「低カースト」という立場

さて、成人してから学習する機会を得た彼女たちは、地区内ではどのような存在なのだろうか。

(略) 私たちはサヒカースト¹⁸⁾ です。サヒは肉を売るカーストなんです。(略) 最近では、お金のある人が肉を売ってます。自分の店でね。今じゃ、肉屋をするには、冷凍しておかないとね。機械が必要だから、昔と違って。(笑) 冷蔵庫がいるからね。お金がないと無理。知らないでしょうけど、ネパールでは仕事がカーストごとに決まってるから。私達は自分で

することができないから、他の人に習って覚えたり、やってもらったり。だから、何でもできるわけじゃないのよ。金持ちは知らないけど、私達の間では、同じだと思う。この辺りはすべて同じサヒ。

昔は、大きなパーティーとかでもカーストの違う人とは一緒に座らないんだから。お皿と一緒に触らないしね。(上位カーストと食事を一緒にしないということ。)今はそうでもないかと思うけど。ああ、でも今もそうかもしれない。この前は別だったから。ここじゃあ、(ボタン)そういうことも少ないからね。(沈黙)昔のことだけど、やっぱり、今もそうかも知れない。なぜなら、この前もそこ(近くのヒティ)で洗濯してたら、「この水は汚いからなあ。」って子どもに教えてる親さんがいたしね。私たちは毎日、水汲みしてるのに、汚いだなんて、何故、そういう言い方をするのか、分からなかったけど、今、思うとそういう(私たちが使用しているヒティだから)ことだったのかもしれない。まあ、もういいけれどね。(子どもの手を握る)

(45歳b、野菜・土産物売り)

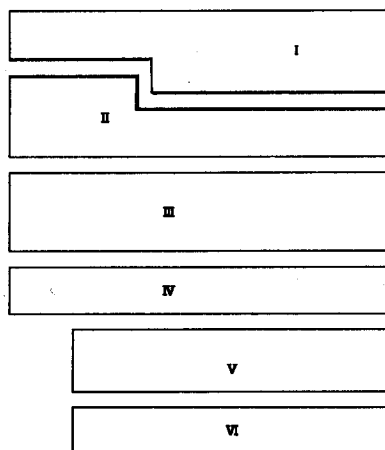
私たちは小さいカーストだから、他の人の(上のカースト)家に行った時、入っちゃいけないって言われたことがあった。このボタンで。私はその時、「あんたのカーストは?」「私はラマだよ。夫がサヒなんだよ。」ってね。そしたら、「あんたもサヒじゃないか。」って言うのよ。¹⁹⁾ 私は「あんたと同じだよ。」って言ってやった。「あたし達は同じ人間だから、同じ血が流れてる。」って。「もし、私の体が切れたら、血が流れる。だけど、あんたも体が切れたら血が流れるんだよ。同じじゃないか。」って言ってやった。金持ちは私たちのことを嫌がってるけれど、そんなこと許さない。だって、同じ血が、人間には流れているでしょ。(略)わたし達がいないと困るのは彼ら(上のカースト)なんだからね。

(略) サノガオンで肉を売っていたときだって、「井戸の水を飲むな。」って言うんだから。「もし、あんた達が飲んだら、その井戸が全部使えなくなる。」って。そこにいたのは一年だけだったけど。お金も損したわよ。たくさん損したからねえ、肉屋はやっぱり無理かなあ。ここからは遠いけどね。ここなら、いけると思ったんだけどね。だめだった。私たちは(その)水を使えなかった。ジャボ(マハラジャン)がね、いちいち言ってくるんだ。それから、サドバトにも行ったけどね。一日50ルピーぐらい稼いだかな。もう、ずいぶん前のことだけど。それから、サノティミにも行ったけど、やっぱり損したからね。だめだった。それからここだね。野菜は緑でしょ。野菜も肉も一緒なのにねえ。肉も野菜も何も変わらないのに、もし、上のカーストに水を渡そうとしたら、怒られるのよ。訳がわからないわ。

(38歳b、野菜売り)

カースト社会の一般的な構造としては、表1のように、大きく6つのカテゴリーに分類される。サヒはその中でVに分類されることになる。上記の二つの事例にあるように、学習者が「サヒ」というカーストであるために、「(上位カーストに属する人々に)水を手渡すことも許されない」という低カースト特有の被差別経験が述べられている。そして、地域で共有されているはずの井戸でさえ、彼らは使うことを許されていなかったことがうかがえる。確かに今日では、「この水は汚いからなあ。」「この井戸の水を飲むな。」というような発言は、ボタン市のような都市部においては、「昔のこと」と片づけられてしまうのかもしれない。しかし、「あそこ(サヒの居住区)はとても汚いんだ。できれば、行かない方がいいと思うよ。」と筆者に何度となく助言する地区内に暮らすネパール人(サヒよりも上位のカースト)が多いことから、今日においてもサヒというカーストは「water-unacceptable caste」(水を与えられないが可触のカースト)²⁰⁾と見なされているにちがいない。

表1 カースト制度における6つの主要な下位区分



- I: 僧侶、司祭、等
 II: 役人、事業家、等
 (I, IIは共にドミナント・カーストとされる。)
 III: 農家、大工、銅の細工職人、等
 IV: 農家、炭士、床屋、等
 V: 肉屋、娯楽、仕立て屋、等
 VI: 清掃業、等

また、近年の傾向として、一部だけが「肉売り」に従事しているが、サヒは主に水牛屠殺に従事する職業カーストであることから、地域のドミナントカースト（サキヤなど）からは低く見られていることがわかる。しかし、最近では、「肉売り」の商売において冷凍貯蔵庫の必要性が高くなっており、従来のように処理したばかりの水牛を切り裁き、そのまま店頭に並べておくようなことは「商品（肉）を台無しにする（腐敗するため）」ことになるため、冷凍保存しておくことが求められてきている。そのため、高額の冷凍庫が肉屋の必須アイテムとなり、「お金があれば、肉屋をすることができる」と受け止められつつあり、同じ地域のサヒカーストであっても、経済的な格差が拡大してきている。

しかし、低カーストに出自をもつ彼女たちは、特別にそのような体験を卑下しているようでもなく、また、社会制度を批判するというより、むしろ平然と自らの被差別経験を語っているように見受けられる。「わたし達は同じ人間なんだからね。（体を）切ったら血が流れてくるんだから。」「彼ら（上のカースト）はわたし達がいなくて困るんだから。」という発言は、差別的な発言を投げかけられても、「同じ人間だから」という姿勢により、避けられている「立場性」を回避しようとしているように受け取れる。そして、現実的な問題に目を向け、「わたし達がいなくて困る。」というように、定められた社会的身分ではあるが、互いに依存し合っている社会関係を見据えた発言がなされている。

ネワールの諸カースト・システムに詳しい石井（1997）によれば、近年の傾向として、従来であれば明確な隔たりがあったと思われるカースト間の関係も、主に都市部を中心に異なるカースト間の通婚が進み、それまで、低位にあったカーストが隣接する上位カーストと同程度の位相に位置づけられるように変化してきているという。

しかし、カースト社会全体としては、その主要な特徴である「名前をもち、互いに序列づけられ、原則的に帰属は生得的（世襲的）で、内婚的であり、また、浄・不浄の観念、力と地位・役割の重なり合いへの指向、および上位政治権力に表わされる統合観念」は、未だに人々の日々の暮らしの中に深く浸透している。なぜなら、特別な場合を除いて、低カーストが上位のカーストの屋敷に入ることは少なく、ましてや住居の最上階にある台所には絶対に入ることは許されない。また、ネパールの人々の間では、「けがれ」の概念が重視され、それは接触や接近により「うつるもの」と考えられており、カースト社会ではそうした行動を避けることが随所に見られるからである。さらに、「けがれ」は口からうつるものともされ、前述の「井戸の水を飲むな。」という発言も、こうした意味からの発言であることがわかる。参考までに、表2にA地区の世帯数別カースト構造を示しておく。

表 2

A地区の世帯数別カースト構造

カースト(尊称)	世帯数	カースト区分
バルム(バフン)	19	I
グバジュ(バジュラチャーリヤ)	10	I
カットリ(チェットリ)	24	II
サキヤ	316	II
シェショ(シュレスタ:チャータリア)	143	II
シェショ(シュレスタ:パーチタリア)	43	II
ジャブ(マハルジャン)	84	III
タムラカール	9	III
ドビ	1	V
カミ	16	V
ナエ(サヒ)	23	V
クスレ(カパーリー)	2	VI
計	690	

注（食物授受の方向に従い、ほぼ上から順に並べたもの。
カースト区分については表1を参照のこと。）

1996年度選挙投票者登録リストより筆者作成
一時居住者や転入者は省略。

(4) 識字プログラムがもたらすモノ

(4) - 1 女性であるために

プログラム参加者の一般的な傾向として、自らに自信がもてず、劣等感を抱いているケースが多い。それは、「自分たちは何もできない」と思いこんでいる人が圧倒的に多いからである。

一度、女性に生れたら、他に何も。他に何もできないでしょ。結婚後、ずっと仕事をしてきたんだから。女性だから、子供も産み、育てる。他にないでしょう？お金がないからね。疲れて、体もだるいけれど、仕方ない。誰も働けないから。お金があったとしても、女は仕事（家）をしないとイケないからね。

(45歳b、野菜・土産物売り)

女の子は学校に行けないって、言われてたから。それが当たり前だったし、別におかしくはなかったから。

(24歳、農業)

仕事があればいいけれど。誰も何もしようとしなくてしょ。もし、誰かが、もっと自由な、もっと何でもできる（仕事を）社会にしたらいいけれど、それは無理でしょ。仕方ないから。私にも無理なことは分かっているから。だって、ここから出ていったら、行くところはないし、仕事だってないじゃない。でも、何かやろうと思う気持があれば、どんな仕事でもやっていけると思う。大きな仕事（お金になる仕事）をもらえたらね。（略）私たちはお金がないから、どんな仕事でもしないといけないのよ。そうでしょ？

(45歳c、野菜売り)

ヒンドゥー教の教えに基づく男子尊重の考え方が重んじられてきたためか、上記の事例以外にも「女に生まれたら、子供を産み、育てる、他にないでしょ？」「女の子は学校に行けないと思っていた。」という発言が複数あり、「女性は家事に徹しなければならない」とする、女性としての性役割について疑問視してこなかったことや、そうした固定的な考え方を否定するような行動をとってこなかったことがうかがえる。

しかし、その考え方を覆したのが、識字プログラムであったのだ。前項でも述べたように、参加者の多くは、「最初は何をしているのか、分からなかった。近所の人が集ってたから覗いてみただけ。」というものであり、初めから識字クラスに参加して読み書きを学ぼうと意欲的であったわけではなかった。

(4) - 2 新たな試み ～迷いの中で～

毎日、水（飲料水）を作ることにしました。家族の健康は大事だから。（略）家の中もそうだけど、家の前だって、みんな掃除しよって言ったんです。病気にならないようにね。息子たちだって、水くみをさせてるんだから。義母はずっと無視してる。（笑）気にいらないのでしょうか。前からね。

(38歳b、野菜売り)

娘が二人います。ここ（ネパール）では、男の子が生まれると、とても喜ばれるんです。だから、下の子が産まれた時は、家族が何て思うかと。子どもと過ごしながら、夫にも悪いと思ったこともあった。でも、夫はこの子（下の娘）を可愛がってくれてるし、私もクラスで知ったことを伝えたいです。（沈黙）その時、（夫は）何も言わなかったけれど、最近二人の子どものこと、とても可愛がってくれてるから。

(27歳、農業)

誘われるがままに参加した学習ではあったが、彼女たちが学んでいたクラスでは、読み書きの学習と平行して、衛生管理や子育てに関する保健医療や家族計画の知識、妊娠、出産に関しても同時に情報提供していた。育児や出産に関する情報となると、性別役割分担を助長することにつながりかねないと考えられるが、彼女たちが参加したクラスでは、男性も育児に積極的に参加することを促し、また、女兒が生まれ

でも悲しむことなく、その誕生を祝うテーマが議題として話し合われていた。

こうした情報を摂取するに際し、識字教育とは直接関係しないようにも考えられるが、一般的に読み書きの学びは、何かを正確に「理解する」「知る」際に、より効果を発揮する。それは、単に、文字が書ける、読めるという能力を身につけること以外に、そこに付随する様々な知識の拡大をねらうことで、より学習の必要性が高くなっていくからである。残念ながら、ネパールの識字教育は、読み書き学習のみが先行する形で行なわれていることが多く、ポストリテラシーの役割が完全に理解されていないようにも映る。そうした中で、上記の例は、意図的な改善策を行なった結果のひとつと見られる。

さて、NFEを教育支援の枠組みで捉えるならば、それは、開発案件に求められる「変化を求めた積極的な外部からの介入」と考えることも可能であろう。開発途上国を舞台に繰り上げられる開発施策は、特に90年代に入ってから人間中心主義に視座を据え、援助活動を行っている。「開発が『人間』の潜在能力を最大限に引き出し、それによって生活の向上と自立、選択の自由などを促進するプロセスである」とすれば、それは物質的、環境的、経済的、社会的な現象であると同時に、当然、『心理的』な現象をとともうものである。」(佐藤,p282,1996)「心理的」なものであるがゆえに、被援助者の心の動きは時間の経過と共に揺れ動き、外部からは明確に判断されにくいプロセスをたどることになる。

以下に示す例は、学習参加者の心の動きを示すものであり、プログラム参加当時の想いと、プログラム終了後の心の動きを映し出していると考えられる。

(略)16歳のときに結婚しました。子どものころから学校には行ってません。家の手伝い(農業)をしてました。ネパールの文化で女の子は学校に行けないのです。結婚も、親が勧めてくれたので。叔父が紹介してくれました。ネパールでは女の子は早くに結婚した方がいいっていわれたから。両親は結婚が決まったとき、とても喜んでました。でも、私は何をしたらいいのか分からなかった。結婚はしたけれど、最初は何をしたらいいのか、分からなかったんです。(略)

私は早くに結婚したけれど、それまでは何をしたらいいのか、分からなかったんです。結婚後、妊娠したので病院にいったら、「あなたは何歳？」って聞かれましたよ。とても恥しかったです。嘘をつけなかったで、年齢を言ったら、怒られました。子どもを産むには早いってね。それから、子どもが産まれるまでのしばらくは、まだ独身だって言ってた頃もありました。恥かしいから。(笑い)でも、私の母だって、16歳で出産してたし、何も問題はないと考えてたのに。レレー(バタンの南方の村)に居たときは、結婚は早い方がいいっていわれたのに。でも、プログラムに参加してから、結婚後の問題とかを話し合ったりするようになった。それから、少し、早すぎたのかと思うようになった。何か、間違ってたのかと、悩んだ時もあった。最初はなんてなのか、分からなかったけど、今、2人目の子供を育ててるでしょう。その意味がよくわかるような気がする。だって、何でも私に聞いてくるし、私が知らないとこの子が困る。上の子は、もう、自分でどこにでも行けるから、心配ないけれど、この子はまだ、5歳。私がしっかりと教えてやらないと困るから。だから、クラスで教わったことが、役立つことがわかってきた。自分でも何かうれしいでしょ。何をするのが分かんると。

ネパール語の読み書きは、はじめて行くつもりなんてなかった。勉強もしたことがないでしょう。そんなこと(勉強すること)よりも、早く家事や仕事を手伝わないといけないという気持ちの方が、強かったから。義母はいつも「何してるの。」と不機嫌だったから。

(27歳、農業)

Ⅲ：考察

前項の27歳の女性の例は、半ば偶然に参加したプログラムに継続して顔を出すことにより、それまでの自分を見つめ、考えて行動するように変化してきたことがわかる。勧められて結婚したことを多少後悔しながらも、自分の過去を振り返っている様子が見えてくる。こうした「振り返り」は短期間に行なわれたのではなく、子育てによる時間的な経緯の中で展開されていったと考えられる。

プロジェクトの実証的な成果のみを重視するINGOの体制からすると、時間の流れとともに行われた「振り返り」は軽視され、上述の女性はプログラム終了後、「学習内容を把握できていない」と報告されてしまう。確かに、何かを学ぶにあたって、即時に習得していくことを求められる場合もあるが、学習後

の時間的経緯の中で、学習者自身の内面的な学びを重視することも大切ではなかろうか。そのような例は、何も識字教育に限ったことではないが、学習者の理解度を把握する上で、時の流れとともに個々人の中で展開されていくひとつひとつのステップも考慮されていくことを求めたい。

本稿で紹介した事例は、調査内容の一部分であるが、全体としては次のように集約できるのではないか。まず、学習者たちは、自分よりも上位のカーストに差別的な態度をとられてきたことを「苦い経験」と捉えているものの、それに対し、「仕方がない」「どうすることもできない」と語っている。このような諦めの境地に加え、「お金がないから」「どんな仕事でもしないとイケない」、また「ここから出て行ったら、行くところがない」と述べ、辛い状況ではあるが、路上で野菜を売りながら日銭を稼ぐことに徹している姿がうかがえる。

「自分は低カーストだから仕方がない」という否定的な状況認識に加え、カーストという出自に基づく序列体系を受け入れていることがうかがえる。そして、「大きな（お金になる）仕事があれば、金持ちになれる」と信じ、他のカーストが嫌がる仕事でも引受けようとする姿勢が伝わってくる。また、「私たちは低カーストである」と、その「立場性」を認識している一方で、自分たちの子どもには、他のカーストから受ける差別的な扱いを経験させたくないという、親の横顔も確認された。今日では、都市部を中心に経済的な成功により、低位のカーストでも土地や財産を獲得し、子どもたちに十分な教育を受けさせようとするケースが出てきてはいる。しかし、仮に裕福といわれる「資源」を獲得したとしても、出自に基づく社会的差別は消えることはない。

さらに、彼女たちの生活全般から観察されることは、単独で行動せず、仲間とともに行動しようとする「共同性」が強いことである。「ここに居れば、何か困ったことがあっても、助けてくれるから」「この辺りは皆、同じ（カースト）」とするように、助け合いながら地区から出て行こうとしない「閉鎖的側面」が確認された。識字クラスを編成するにあたって、同じコミュニティに属する者同士を組み合わせることが、学習を進めて行く上でも考慮されなければならない点であるようだ。単に、知らない人よりも顔見知りの方が気楽で学習しやすいという考え方もあるが、これは彼女らの「仲間集団」を配慮してのことであるという。

IV：結びにかえて

本稿で取り上げたネパールの低カーストの女性たちは、教育は不要とされ、幼少期に学校教育を受けることができなかった。そして、仮に通学しようとしても、低カースト故に拒否され、さらに、大人になってからも文字は仕事に関係ないと言われ、文字に接する機会を持てなかったのである。そのように周辺化された女性たちを対象に行われている識字プログラムの今後の課題を、本稿のまとめとして、次の三点にわたって指摘しておきたい。

第一に、現在おこなわれているNFEプログラムは公教育に比べ、彼女たちのようなマイノリティーがアクセスしやすい教育支援策ではあるものの、プログラムを提供する側の立場性（高カースト、高学歴、富裕層）と学習者の立場性（低カースト、女性、低学歴、貧困層）の間には一定の距離があり、学習者側から積極的にアプローチするには困難な状況が存在していることである。従って、低カーストの生活現実や学習観により密着したプログラムを提供する体制づくり、とりわけ学習者の生活世界を理解し、彼女たちの立場を優先することができる指導者の育成を求めたい。

第二に、識字学習プログラム終了後のアフターケアがなされているケースが少ないことである。就学経験の乏しかった成人女性を対象に進められるプログラムは、様々な背景をもつ人たちの学びでもあり、彼女たちを積極的に支援していく必要がある。一つの改善策として、ボストリテラシープログラム終了後にも彼女たちに接近することを提案したい。彼女たちは家庭の中で文字文化のない生活をしているケースが多い。よって、プログラム終了後の継続的な支援策、例えば定期的に学習内容の確認作業を行う機会を長期にわたり設けることなどが望まれる。なぜなら、プログラム終了から4年も経過してから、改めて学習内容の意味を理解しはじめている様子がうかがえるからであり、そのような時間的な経緯の中で展開され

ていった学びも高く評価されるべきことだと考えるからである。

第三に、本稿では識字プログラムを取り巻くコンテクストを、カースト制度を下部構造にもつ社会を中心に分析したが、当該社会の中で周辺的に位置づけられている学習者の女性たちは、絶えずこのコンテクストの中に置かれており、人間社会が生みだす混沌とした軌轢の中にさらされているのである。

また、開発施策に反映されている政治的、経済的、社会的な利害の絡み合いの中で、彼女たちのような存在が、時には開発案件を取り込むための市場の題材として扱われてしまうことにもなりかねないことを、開発NGOを含め、支援活動に携わる人々の視野におさめておく必要性を述べておきたい。

<注>

- 1) Center of Statistical Year Book Nepal 1999
- 2) HMG Ministry of Education The Master Plan Team, 1997『The Basic and Primary Education Master Plan for 1997-2002』
- 3) CERID, 1998, Fact Sheet, Sep, Issue 2, Tribhuvan University によると、ネパール全土で210,750名、ポストリテラシープログラムには51,750名の参加が報告されている。報告書により、基礎的識字学習期間の参加者とポストリテラシーの参加者を合わせて報告しているものもある。
- 4) パンチャーヤット体制とは、マヘンドラ国王（在位：1955-1972）により制定された統治システムであり、具体的には国王を頂点として、国、県、郡、市町村の各レベルでの評議機関（パンチャーヤット）を通して全国を統治、統合するというものであった。1990年にネパール会議派と統一左翼戦線が連合して民主化運動を起すまで、パンチャーヤット制度は継続された。（石井 編、1996）
- 5) 例えば、小林、1999や南、1997。
- 6) 「立場性」とは、あまり使用されない語ではあるが、本稿では、ある人の置かれている「立場」を現時点のみを示す意味として用いるではなく、その人の「過去（背景）から現在に至るまでの両方を表す」語として用いていることを述べておく。
- 7) 識字能力の判断は、ネパールの場合、小学校3年生程度の能力を保持しているかどうかで測られている。（Nepal Human Development Report 1998, p76）
- 8) 本稿で取り上げる識字プログラムは、ネパールの公用語であるネパール語の習得をめざすものである。民主化（1990）以降、初等教育の普及やNFEの推進など、ネパール語を通じて国民統合を図ろうとする言語政策の動向は一定の成果はみられるものの、国全体としてはさほど進展していないようにも思われる。それには、ネパール語の持つ限界とこの国の公教育における問題があげられる。

ネパール語は、現憲法（1990）において公用語（official language）、および国語（national language）とされているものの、国語としては未成熟な側面があると指摘されている。それはネパール語の次のような性格に基づくものである。一つには、どの言語にも様々な方言があるように、ネパール語にも数種の方言がある。その中でも、カトマンズ方面の方言が主流（標準語）となっている。しかし、異なる方言間では互に通じず、ネパール語の話者同士でもコミュニケーションがはかれないケースが生じている。二つ目には、日常生活で用いられるネパール語と学問や行政において用いられるネパール語との違いである。そもそも、ネパール語は語彙が非常に少ないため、学問や公的な場で用いられる際、サンスクリット語や英語からの借用語が非常に多くなり（Hutt. M. J., p51, 1988）、ネパール語の識字者であっても、普段、ネパール語を使用しない少数民族である場合、新聞や公文書などを理解することは困難であると考えられる。こうしたことは、どの言語においてもあてはまることであるが、ネパール語の場合、その度合いが他に比するものではないということを述べておく必要がある。

さらに、民主化以降、少数民族の言語も国民語（rastra bhasa）として保証されているが、母語にる学校教育は認められているものの、実際にはほとんど行なわれていない。というのも、特に都市部においては、教育を受けた人々が話す言語はネパール語というように、ネパール語の権威的な位置づけが確立してしまっているからである。そして近年では、英語の普遍的な要素が重視されるようになり、英語で教育を受けることが注目されはじめているため、母語による初等教育は有益ではないと判断されており、生徒が集まらない状況にある。

また、公教育の場では、ネパール語の学習は行われているが、今日では私立学校における英語による初等教育が拡大してきている。そのため、富裕層は母語に加えてネパール語、および英語を駆使することを重視するようになり、将来的には子どもを海外へ留学させたり、初等教育から海外の全寮制の学校に入れるなど、国の

公教育に対する信頼の無さがうかがえる。

このような現状を生み出す要因としては、そもそも、ネパールが多民族、多言語国家であることがげられる。ネパールで用いられる言語は、主としてインド・ヨーロッパ語系とチベット・ビルマ語系に大別され、その数はおよそ60数種にもおよぶ。特に、山間部で使用されている言語は文字を持たないため、記述的な研究は少ない。さらに、未だ個々の言語の正確な話者人口や言語数は把握されておらず、不明瞭な言語や方言も存在している。こうした現状に対し、国民語政策提言委員会の答申では、言語調査の必要性が指摘されている。また、委員会のメンバーに少数民族出身者を入れるなど、マイノリティに対する配慮もされており、ネパール語を中心に少数話者語の発展が主張されている。しかし、そうした政策を支える資金や政治的な側面など、言語政策にかかわる諸問題は複雑ゆえに、今後の見通しは不明確なものであるといえる（小林、2001）。

- 9) Guruとは高僧を意味し、一字一句、指導者に続いて復唱する形で授業が進められていく暗記中心の教授法のことをいう。アジアの宗教の特徴でもあるが、ヒンドゥーの場合、教育はバラモンという社会集団の特権であり、内容も高僧が述べた教えや成文化された經典を徹底的に暗記するというものであった。ネパールの場合、公教育においても、このGuru-kuruシステムを脱しきれていないという指摘も多い（例えば田中、1989）。
- 10) PRA（＝Participatory Rural Appraisal）とは、地域住民が自らの生活の知識や状況を共有し、高め、分析し、さらに計画、行動、監視、評価することを可能にする一連のアプローチや方法のことである。（Chambers, 訳書、2001, p249.）具体的には、「主体的参加型農村調査法」と訳される。今日では農村開発のみならず、政策や成人識字学習の場においても用いられているため、「住民主体による学習と行動の開発」（＝Participatory Learning and Action）として考えられている。
- 11) REFLECT（＝Regenerated Freirean Literacy through Empowering Community Techniques.）とはブラジルの教育学者P.フレイレが提唱した教授法に習う識字プログラムの教授法であり、ネパールではイギリスを本拠地とするINGO、ACTIONAIDにより展開されている。REFLECTの主な特徴は、PRAの理論（注の10を参照のこと）を基軸に、学習参加者全員でコミュニティの地図を作成しながら、コミュニティ内で何が不足しているか、また何が必要なのかを全員で討議していくことである。指導者はファシリテーターとして、テキストを重視せず、学習者とのディスカッションをもとに、学習者が必要な知識、技術、気づき等を共に発見していくことを目指すものである。その他、各INGOにより、独自の識字プログラムが開発され、運営されている。
- 12) INGOが実施しているプログラムはこの限りではない。他にも軌道にのっているプログラムが多数あるが、紙幅の都合上、別稿で記していくこととする。
- 13) カトマンズ盆地の先住民。インド文明の影響を強く受け、ヒンドゥー教、仏教を併合し、カーストシステムを持つ文化を築いた。18世紀後半まではカトマンズ盆地を中心とした主人公であったが、今日においては、ネパールの多数の民族の中のマイノリティに位置づけられる。チベット・ビルマ語系の言語を母語に持つ。（母語人口は約69万人、1991年現在）
- 14) バタン市の民族構成はネワールが43.1%、バフン、チェットリ、職業カースト（Occupational caste）などのバルバテ・ヒンドゥー（Parbate Hindu）が42.5%、タマン（Tamang）をはじめとするその他の民族が残りの約10%を占めている。
- 15) 1996年度選挙投票者登録リストより。
- 16) 調査の概要であるが、カトマンドゥ近郊のバタン市、A地区（仮称）を中心に参与観察を行い、地区内に居住する識字学習経験者をキーインフォーマントとするインタビュー調査、並びに地区内で識字プログラムを運営しているINGOやLocal NGO（以下LNGO）のメンバーや、地区内の居住者等にも聞き取り調査を行なった。（調査期間：1997,4/20～5/31,8/1～11/30、1998,3/1～5/30、2000,2/27～3/20、2001,9/12～9/22）その結果、52名の学習経験者に話を聞くことができたが、本稿においてはそのうちの15名のデータを扱うものとする。インタビューの形式はライフヒストリー法を考慮に入れ、オープンエンドで自らの生い立ちや生活経験などを1人約1時間から2時間を目安に、自由に語ってもらうことにした。キーインフォーマントの紹介にあたっては、同地区内で活動するINGO、LNGOのスタッフの協力を得た。
- 17) カミ、サルキともにバルバテ・ヒンドゥーの職業カーストであり、一般に、カミは鍛冶屋、サルキは皮革職人、靴屋に従事するカーストとされている。近年においてはこの限りではない。
- 18) サヒ（Sahi）とは屠殺業に従事するカーストである。近年、「サヒ」と呼ばれているが、もともとは「カサイ（Kasai）」という名で呼ばれていた。このような名称の変化は、アンタッチャブルとされる職業カースト層に多く見られる現象である。彼らはそれまでのバルナモデル（四姓制度）における「ナチュネ（Nachhune）」とい

う職業カースト層に対応するネパール語を使用しながらない傾向にあり、同様に、自分の属する「ジャート(jat) (=カースト)」の名称を好んで変名する動きが生じてきている。「サヒ」という名はチュットリ・カーストに属する名の一つであり、この変名は明らかに紛らわしさを意図的に狙った攪乱戦術との指摘がある。(山本、2001,p206.)

- 19) この事例に関連して述べておくが、一般的にカースト社会は内婚的であるが、異なるカースト間で結婚し、子どもがもうけられる例は存在する。その場合、子どもは母親のカーストを受け継ぐ(Rana&Dhungel,1998,p11.)とされており、子どもは地位の高い方の親のカーストと同等とは認められないのが普通である。しかし、バルバテ・ヒンドゥーの高位カーストを父親にもつ場合はこの限りではない。
- 20) 上位のカーストに水を手渡すことを許されていないカーストの意。

<引用・参考文献>

- Bista,D.B, 1990, Fatalism and Development Nepal's Struggle for Modernization, Orient Longman
- CERID,1996, An Inquiry into the Causes of Decline Adult Participation In NFE Literacy Program, Tribhuvan University
- CERID,1997, Raising Awareness on Importance of Non-formal Education through Mass Media, Tribhuvan University
- CERID, 1998, Fact Sheet, Sep, Issue2, Tribhuvan University
- CERID, 2000, Education for All Year Assessment Nepal Country Report, Tribhuvan University
- Central Bureau of Statistics, 1999, Statistical year book of Nepal
- Chambers,R 1995,『第三世界の農村開発 貧困の解決 私たちにできること』、穂積智夫、甲斐田万智子 監訳、明石書店
- Chambers,R 2001,『参加型開発と国際協力』、野田 直人、白鳥 清志 監訳、明石書店
- Comings,J.P, 1995, "Literacy Skill Retention in Adult Students in Development Countries" International Journal of Educational Development, vol.15, (1), pp. 37-45.
- David Archer & Sara Cottingham, 1996, Reflect Mother Manual, ACTIONAID
- Gellner,D.N, 1996, Monk, Householder, And Tantric Priest : Newar Buddhism and its Hierarchy of Ritual, Cambridge University Press.
- HMG Ministry of Education, The Master Plan Team, 1997, The Basic and Primary Education Master Plan for 1997-2002
- Hutt,M.J,1988, Nepali A National Language its Literature, Sterling Publishers Private Limited New Delhi
- 石井 薄、1997、「家族、親族、婚姻、カースト ～ネパール、ネワールからの考察～」『岩波講座文化人類学 個からする社会展望』第4巻、岩波書店、pp31-95.
- 石井 薄編、1996、『もっと知りたいネパール』、弘文堂
- 石井 薄編、1997、『アジア読本・ネパール』、河出書房新社
- Khanal Rabinra, 2001,Democracy In Nepal Challenges and Prospects, SMRITI BOOKS
- 小林 茂、1998、「ネパールの低開発と知識人：D.B.ビスタ氏『運命論と開発：近代化に向けたネパールの闘い』をめぐって」『比較社会文化』、九州大学大学院、第4巻、pp.49-64.
- 小林 茂、2001、「ネパールの低開発と教育」、ネパールのマージナルグループにおける政治人類学的研究・研究会(京大会館於：2001.1) 発表資料
- Lalitpur Sub-Metropolitan City, Lalitpur Nepal, 2000, A Base Line Survey of Lalitpur Sub-Metropolitan City
- Nepal South Asia Center, 1998, Nepal Human Development Report
- 南 真木人、1997、「開発一元論と文化相対主義：ネパールの近代化をめぐって」『民族学研究』第62号、pp.227-243.
- 宮島 喬、1999、『文化と不平等』、有斐閣
- 長岡 智寿子、2000a、「開発のパートナー＝NGOの動向 ～ネパールにおける教育開発の事例をもとに～」、『アジア教育研究報告』、京都大学大学院比較教育研究科、第2号、pp31-54.
- 長岡 智寿子、2000b、「リテラシー研究の現状と課題」、『大阪大学教育学年報』、第5号、pp.169-183.
- Rana.Pashupati Shumshere J.B.&Dhungel Dwarika Nath.,1988,Contemporary Nepal, Vikas Publishing House Pvt.Ltd.
- 佐藤千寿、村上いずみ、神馬征峰、1999、「成人識字教育をエントリーポイントとしたコミュニティー・エンパワメント」、『国際協力研究』、国際協力事業団、国際協力総合研修所Vol.15,No.1,pp19-31.

- 佐藤 寛 編 1996、『援助研究入門 ～援助現象への学際的アプローチ～』、アジア経済研究所
- 田中 研一、1989、『ネパールの学校教育に関する情報集』青年海外協力隊、国際協力事業団
- Tuladhar.S.K., 1999, “Main Trends and Issues on Non-formal Education” , Education and development, CERID,Tribhuvan University, pp.136-151.
- UMN Yala Urban Health Programme Detailed Plan with Targets & Indicators 2057/58 (1999/2000)
- UMN, 2000, Non-Formal Education Support Office and Book Project Annual report
- World Education, 1991, The Nepal National Literacy Program
- 山本 勇次、2001、「ネパールの民主化と都市スクンバシ集落 “コミュニスタ” 的特徴」『立命館大学人文科学研究
所紀要』第76号、pp.199-246.

An Analysis of Adult Literacy Learners in Nepal : In the Context of Caste Society

NAGAOKA Chizuko

Since 1951, Nepal has carried out a series of development measures for its modernization, but there still remain various uncertainties politically, economically and socially. Educational development policies are faced with various problems.

Non-formal Education (NFE) programs are regarded as priority policy matters and literacy education is practiced all over Nepal, particularly for adult women.

NFE programs are led by NGOs rather than by the government, and the number of NGOs concerned is said to exceed 500. However, most of those programs do not seem to be paying proper attention to the reality and true needs of the learners as far as the stance and perspectives of the program providers imply. Also, competition among NGOs is on the increase, and Nepal is becoming a kind of 'market for development projects.'

Based on existing research, this paper attempts to reexamine ongoing literacy programs in Nepal and to analyze their implications for the learners in the context of caste society.